

情 報

第3回国際歯科技工学術大会

(併催／日本歯科技工第20回学術大会・国際学術大会)に参加して

藤 口 武 明倫短期大学 歯科技工士学科

第3回国際歯科技工学術大会が社団法人日本歯科技工士会の主催で平成10年10月31日～11月2日、横浜市西区みなとみらいのパシフィコ横浜で開催された、全国より約5000名の歯科技工士が、また、アジア各国から約40名の参加者があった。

「やさしさをあなたに」を大会テーマとし、一般講演、ポスターセッション、テーブルクリニック、テクニカルコンテスト、さらに特別講演、シンポジウム、日本歯科技工学会評議員会、総会と執り行われた。また併催されたデンタルショーには120余のメーカーが出展し最新技工器材の展示をしていた。歯科技工技術の領域だけでなく歯科全般の講演が多数あり、特に審美、顎口腔機能をテーマとしたシンポジウムには多くの参加者があった。

一般講演は、エステティック、インプラント、顎口腔機能、スポーツ歯学、外科、解剖、ハイジーン、オーラルアセスメント、歯周補綴、表面形状、全部床義歯、局部床義歯、CAD/CAM、コンピューター、教育、歯学史、経済、チタン、鋳造、鋳付け、小児歯科、矯正、顎顔面、カリオロジー、感染、環境、測色、福祉、歯科技工士の将来展望などと多岐にわたり、73題が口頭発表された。

シンポジウムとしてエステティック、顎口腔機能、教育等がおこなわれた。

4カ国円卓会議では、シンガポール、オーストラリア、インド、ブラジル各国においての歯科技工および歯科技工士に関する教育、業務、経済、関係法規についてのディスカッションがおこなわれた。

依頼講演は鋳造、ミリングテクニック、鋳付け、陶材、義歯床製作、レジン重合、粉塵、日本歯科技工学会の変遷など12題の発表があった。

テーブルクリニックは、ポーセレンワーク、エステティック、表面形状、測色、セラミックス、アタッチメント、インプラント、ワックスアップ法、チタン、鋳造、全部床義歯、局部床義歯、義歯の設計、人工歯排列法、CAD/CAM、コンピューター、鋳付け、研磨、小児歯科、矯正等において将来の歯科技工に関しての創意工夫ならびに、新しく開発された素材の使用

法について発表がおこなわれた。

テクニカルコンテストにはポーセレンのフルマウス、メタルプレート、パーシャルデンチャー、石膏カービング等の作品の他、歯科技工に関連した物だけでは無く、歯科技工の技術を利用した絵画、彫刻も出品されていた。

ポスターセッションでは義歯刻印、顎顔面補綴、口腔機能障害、顎口腔機能、福祉、総義歯、局部床義歯、高分子材料、CAD/CAM、コンピューター、レーザー溶接、チタン、鋳造、接着、教育、歯科技工競技大会等の発表がおこなわれた。明倫短期大学歯科技工士学科から神田俊昭他、「加工方の違いによる歯科補綴物の性状について」第2報 機械的性質の比較と、藤口武他、「歯科高分子材料の細菌付着性に関する研究」の2題の発表を行った。

ポスターセッションの指定時間以外を利用し、多くのテーマから今後の歯科技工教育に関係ある中から1日目は5講演を聴講した。

1. 井上昌幸(東京医科歯科大学)は、生体に調和した歯科修復物とはと題して、

①機能時において隙が20～30 μ mあるような接触点を再現すること。

②印象法、模型作成法を考慮することにより、間接法で作成するクラウンの咬合面の高さを的確にできること。

③ブラークの沈着率を考えたカントウアーを付与すること。

口腔内環境に補綴物を調和させるための必須事項についての発表をされた。

2. 田村勝美(国際デンタルアカデミー)は、顎運動と咬合面形態と題して、審美性を考慮した修復物作成法の一考察として、咬合器操作による形成法についての発表をされた。

3. 山本尚吾(東京都歯科技工士会) 西村好美(大阪府歯科技工士会) 田村勝美(国際デンタルアカデミー)は、21世紀への提言と題して、これからの歯科技工士が考えなければならない事柄、歯科技工の歩むべき方向について考えを発表をされた。三氏とも今後の歯科技工は審美、機能が追求されこれらを意識しない技工士は淘汰されて行くとの意見であった。

4. 木谷雅人(文部省生涯学習局振興課)は、生涯研修の重要性に関することと題して、21世紀に向けての教育は、能力中心では無く、目的意識を持ち資質の向上をはかる事に重点を置くと共に、実習、演

情 報

習に重要性を置き、新しい医療に対する研究をより発展させる方針であるとの発表をされた。

5. 石岡靖（新潟大学名誉教授）歯科技工士教育制度と卒後研修の展望と題して、歯科領域において高度の医療技術が要求され、歯科技工士を補助者から技術専門職への昇格の必要性が言われて久しいが今だ確立されていない。21世紀の歯科技工士教育は、専門知識を有する専門技術者を養成し社会的地位の向上を目指さなければならないとの発表をされた。

2日目は2講演を聴講した。

1. 宮川修（新潟大学歯学部歯科理工学講座）は、歯科におけるチタン利用と題して、1）鋳型材の種類と鋳型空洞内のチタン溶湯の流れと鋳造欠陥の関係 2）鋳造体の表面反応層の構造とその影響 3）鋳造体表面の効果的仕上げ方法の考察があり、2）については表面反応層のクラックを削除する事により機械的強度の向上が見られる事、3）においてはチタンボンドのデギャッシングの設定温度を550～600℃とし、表面処理を荒目にするると焼成時のチタン表層に発現するTi-Al層が焼付け効果をより強度のものとするとの発表をされた。
2. 仁科匡生（神奈川歯科大学付属歯科技工専門学校）は、精密鋳造とCAD/CAMにおけるチタン加工と題して、歯科技工における加工技術の歴史と現在のチタンの利用法、特にコンピュータ数値制御、CAD/CAM等の技術開発とこれからの歯科技工士養成について発表をされた。

評議員会においては優秀論文、認定士制度などについて協議が行われた。

優秀論文の選考に関しては本年度の雑誌に発表された中より3件を選考、表彰することを承認した。

日本歯科技工学会認定士制度は、歯科技工学の専門的知識及び臨床技能・経験を有する歯科技工士（歯科医師）により、歯科技工の高度な水準の維持と向上を図り、国民保健福祉に貢献することを目的とし、本学会に在籍し、長年歯科技工学の専門的知識と技術の発展と向上に務めたもの顕彰し認定するものである（ただし専門的知識と技術の優劣を認定する物では無く、特権的メリット無し）。認定士登録は1）技工士法17条1項 2）5年以上学会員歴 3）学術大会3回以上 4）技工学会または雑誌で発表 5）認定士2名の推薦を全て（暫定措置とし①技工士法17条1項 ②7年以上学会員歴 ③5年以上学会員歴と発表 ④認定士2名の推薦の条件又は、特例措置とし 1、10年以上技工士会会員歴で日技「生涯研修」2期以

上終了 2、認定士2名の推薦を全て）の条件を有する会員の申請後、認定審査委員会の審査を経て発行される。認定審査委員の選出方法は当初、理事会が選出する。日本歯科技工士会からは全国6ブロックに学会支部を設け各支部より選出する。

歯科技工士学校関係者、歯科技工士会関係者と多くの参加者で会場は盛況であった。特に歯科技工に密接に関係する講演は会場に入りきれない状況であったが、主要テーマとしての講演でも歯科技工士にとって興味の薄いものは、大きな会場にも関わらず閑散としていたため、演者が気の毒であった。

広い会場で多くの講演があり興味のあるものだけの聴講となったが、いずれも21世紀を踏まえた歯科技工に関連ある内容で、今後の教育に反映して行きたいと考えている。

平成11年度（第21回）学術大会は平成11年8月21日（土）22日（日）に大阪メインシアターにて開催される。